仮面ライダー炎竜
episodeダウンフォールンドラゴン

柏葉大樹

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は竜王が修羅へと堕ちし終わりの始まりの物語である。柏葉大樹の終わり、そして始まりである。この物語の結末はハッピーエンドではない、一人の男が傷だらけになり身も心もすり減らしていった破滅の物語である。

「ＩＳ×仮面ライダー　仮面ライダー炎竜」の前日譚に当たる話です。本編を読んでいるとなお楽しめますが基本的には独立した話です。感想お待ちしています。

目次

仮面ライダー炎竜ｅｐｉｓｏｄｅダウン
フォールンドラゴン前編　――――　1
仮面ライダー炎竜ｅｐｉｓｏｄｅダウン
フォールンドラゴン後編　――――　30
仮面ライダー炎竜ｅｐｉｓｏｄｅダウン
フォールンドラゴン　エピローグ　55

仮面ライダー炎竜ｅｐｉｓｏｄｅダウンフォールンドラゴン前編

これは柏葉大樹が自覚している最初に転生した世界における最期の１ヶ月間の物語である。この話は今語られている物語に至る始まりの物語である。だが、この物語の終わりは決してハッピーエンドではない。あるのは一人の男があまりにも痛々しく戦い続け、身も心も限界を超えてすり減らし壊れてしまう破滅の、堕落の物語である。

２０ＸＸ年、ＩＳ世界において主人公である織斑一夏がＩＳ学園に入学してから５年の月日が流れた。この年にこれまでは自国開催が行われなかったモンド・グロッソ世界大会が日本で行われることになったのだ。さらに開催地はＩＳ学園に決定した。

大会開催の１ヶ月前のある日、更識邸にて。

「それじゃ、簪ちゃん。来月にね。」（楯無）
「お姉ちゃんも気を付けてね。」（簪）
ロシア代表、更識楯無は妹の簪の顔を久しぶりに実家である更識本家へと戻っていたのだ。
楯無は変わりなくロシアの代表を務めており、簪は選手ではなく後任の育成のために教師兼研究職の道を歩むべく大学で勉学に励んでいた。
「ねえ、お姉ちゃん。彼は見つかったの？」（簪）
「いえ、亡国機業にいるとは聞いていたけど逮捕者に彼の名前は無かったわ。もしかすると、あの日の火事で本当に。」（楯無）
簪から出た彼という言葉、一夏から遅れてＩＳ学園に入学したもう一人の男性操縦者である柏葉大樹のことである。大樹は簪と楯無がＩＳ学園に在籍していた５年前の冬に突然の失踪を遂げた。その直後に彼が生まれ育った生家が火事になり、その焼け跡から黒焦げの遺体の一部が見つかった。警察はそれを柏葉大樹と断定、放火による自殺として処理をしたのだ。動機としてその数日前にあった両親が殺害されたことと警察から学園の関係者に連絡があったのだ。だが、彼女たちが亡国機業との戦いでは何度か姿を確認、彼女たちのフォローを行っていたのだ。
その戦いが終わってから大樹の行方は知れず、それから５年の月日が流れてしまっ

た。

「ねえ、彼女はどうなの？彼が学園から離れるまではずっと一緒に居たでしょ。」（楯無）

「大丈夫。落ち着いて過ごしてる。今は織斑先生の家に住んでるよ。私も様子を見に行っているし。」（簪）

そして、失踪した大樹の帰りを特に待っている人物がいた。彼女は大樹の友人である一夏の姉、千冬の元で生活をしていた。その彼女は非常に大樹のことを慕っており、長い付き合いのある一夏以上に大樹の生存を信じていた。

「じゃあ、勝手にどこかにほっつき歩いている柏葉君を絶対に彼女の所に帰さないと。」（楯無）

「そうだね。大樹のこと、誰よりも待っているから。」（簪）

そう言いながら楯無が出ようとした時だった。

家の入口の扉が吹っ飛んだのだ。それに瞬時反応した楯無と簪は家の外へと飛び退っていた。

「ここが日本の暗部だということを知ってかしら。」（楯無）

楯無がそう問いかけたのが黒で全身を染め、人相を知らされないように黒いマスクをしている屈強な男だった。

楯無の問いかけに男は答えずに二人に襲い掛かった。
楯無も簪もかつてはＩＳ学園に在籍、現役の選手で暗部の長として第一線で活躍する楯無に代表候補生として努力を続けていた簪は男の攻撃を躱しながら時折反撃もしていた。だが、男も手練れらしく楯無と組み合っても一歩も退かなかった。この場合は楯無が女性ながらに一歩も退かなかったと見るべきだろうが。
「これでも喰らいなさい！」（楯無）
楯無は男と組み合ったまま柔術の技で体勢を崩し、男の頭を真っ逆さまに地面に叩きつけた。常人であれば良くて頭蓋骨の複雑骨折、最悪はそのまま死亡する技。楯無がその技を使ったということはそれほど危険な相手であることを意味していた。
地面に横たわる男。楯無は確実に技が入った感覚を覚えていたのだがそれでも警戒を緩めなかった。横たわっていた男が動き、ゆっくりとした動作で立ち上がった。
「何よ。今の技、確実に頭を割ったのよ。平気でいられるなんて。」（楯無）
男は首に手をやりゴキゴキと音を鳴らした。その様子から楯無はかつて戦った亡国機業の幹部であるスコール・ミューゼルを思い出す。彼女はサイボーグであり、何度も楯無たちの前に立ちはだかったのだ。目の前の男も同じような改造を受けていると楯無は考えた。ＩＳの使用、その考えが楯無の脳裏によぎるがＩＳの無断展開は禁止されており、緊急事態とは言え大会前に戦闘で使用するということに楯無も躊躇してしま

う。

男は楯無の心境も知らずか距離を詰めていく。そこに男の背後から強烈な光がエンジン音を轟かせて迫って来た。

男は背後を振り返り、脅威的なジャンプで迫ってくる何かを飛び越えた。

何かは急ブレーキをかけて楯無と簪の前に停まった。その何かは深紅色のアーマーが目立ち、ライト部分にハイビスカスの花をあしらったバイク＝ハイビスカストライカーに乗っていた。その姿は鮮やかな炎を思わせる鬣に天に向かって伸びる二つの角、鬣と同じ色をした鎧を黒のアンダースーツの上から纏っていた。

「仮面ライダー?」（簪）

簪がその姿を見て呟いた。この場に現れた鎧武者こそこの世界で戦って来た仮面ライダー、仮面ライダー炎竜だった。

炎竜は専用武器である竜炎刀を鞘から抜き放ち、男との距離を詰めていく。男は炎竜を見るやいなや楯無の時以上に激しい攻撃を繰り出していく。それを見た炎竜は必要最小限の動きで男の攻撃を躱していく。そこでさらに男の顔面に素早く重い裏拳を叩き込み、竜炎刀の柄で相手の肩を抑えて空いている手で腰を抑えたところをてこの原理で男を一回転させ、頭を蹴り抜いた。

男はそのまま数メートルほど飛んでいき頭を地面にかすらせながら空中で体勢を立

て直し立ち止まった。男の被っていたマスクは破れ、その下には人間とは思えない醜悪な顔があった。その相貌は人間のものだと分かる顔のほとんどが他の動植物を思わせる形状をしており、その口には鋭い歯が幾つも見えていた。

炎竜は男の相貌に驚くことなく歩み寄り腰のバックル＝戦極ドライバーの刀型パーツを3回倒した。

≪ドラゴンフルーツスパーキング!≫

炎竜は竜炎刀の峰に籠手を当ててそのまま剣先まで籠手を走らせた。その次の瞬間には燃え盛る炎の刃となった竜炎刀で男を頭上から股下にかけて一刀両断した炎竜がいた。男は傷口から炎が吹き上がり、瞬く間に灰と化した。

その戦いをじっと見ていた楯無と簪。炎竜の戦い方にどこか見知ったようなものを感じていた。

楯無と簪の方へ歩いていく炎竜。だが、途中で膝から崩れ落ちてしまった。見たところ肩で息をしていることからかなり消耗していることが見て取れた。

「大丈夫ですか!?」（簪）

駆け寄る簪が見たのは光に包まれて姿を変えた炎竜。その光が止むとボロボロの衣服に伸びっぱなしで洗いもしていないぼさぼさの長髪、伸び放題になっているヒゲと最後に簪が見た姿とだいぶかけ離れてしまっているがその顔を見たときに誰かはっきり

と理解した。

「大樹！」（簪）

失踪していた柏葉大樹だった。大樹は簪が駆け寄るのを見てその場に倒れてしまう。

翌日、更識家とかかわりの深いある病院の一室に大樹の姿はあった。倒れたその時から一度も目を覚ましておらず点滴を受けて回復を待っている状態だった。

「そんなひどい状態になるまでどうして。」（簪）

「分からないわ。結局、亡国機業が殲滅されたから昨日に至るまでの足取りが全く分からないのよ。それこそ、世界各地を放浪していないとこんな状態にはならないわ。」（楯無）

病院で精密検査を受けた大樹の健康状態はあまりにもひどい物で脱水症状に栄養失調、睡眠不足、さらには全身至る所で骨折、炎症、筋繊維や腱がダメージを受けておりまともに動くことが難しいほどの負傷が分かったのだ。

「柏葉君、一体何があったの。あなたが姿を消していた5年間、どれほど過酷な生活をしていたのよ。」（楯無）

そして、その病院に楯無と簪の他に大樹を訪ねてきた人物たちがやって来た。

「楯無さん！簪！大樹が見つかったって本当か！」（一夏）

「更識、説明をしてくれないか。」（千冬）
一夏と千冬の織斑姉弟に友人である五反田弾だった。
「本当に、大樹なんだな。」（弾）
「ええ。柏葉君本人よ。」（楯無）
「どこに居たんだよ。」（一夏）
「分かんない。私とお姉ちゃんの危ないところを助けてくれて。」（簪）
「そうか。詳しい話を聞かないとな。」（千冬）
「あの、彼女は。マドカはどうしたんですか。」（簪）
簪が大樹の帰りを待っているはずの人物、かつては亡国機業に所属していたテロリストである織斑マドカの名を上げた。
「早合点させてもと思い、今日は篠ノ之の家で待ってもらっている。」（千冬）
「確かに、この状態の彼を彼女に会わせるのは酷ですね。」（楯無）
千冬は知らせを受けた時にマドカの記憶にある大樹の姿とあまりにもかけ離れていた時のショックを考慮して今回は現在は篠ノ之神社に戻ることのできた箒の家にマドカを預けてきた。その千冬の判断も間違っておらず病院のベッドの上で横たわる大樹の姿はあまりにも彼女たちの記憶にある姿とかけ離れていた。
「何があったんだよ、大樹。」（一夏）

一夏、楯無は近くに控えているモンド・グロッソ世界大会が控えていること、千冬はＩＳ学園の教員として長い時間はいれず、病院を離れた。病院に残ったのは大学生の簪と弾だった。２人とも大樹の目を覚まさないかと残っていたがその日のうちに大樹が目を覚ますことは無かった。

大樹が病院に入ってから1週間が経過した。弾たちも学生ということもあり中々来ることが出来ない中でただ一人通っている人物が居た。

「よし。」（マドカ）

病室で寝ている大樹のヒゲをそっていたのはマドカだった。亡国機業壊滅後は千冬の保護下で生活しており、大樹の帰りをずっと待っていたのだ。大樹が眠っている間、身体を拭いたり、伸び放題だった髪の毛を切ったりしていた。

「やっと、私が初めて出会った時の姿になったな。」（マドカ）

つたないながらも自身の記憶の中にある大樹の姿に近づいたことでご満悦である。

「‥‥　いつまでも眠っていないで。ずっと、待っていたんだ。これからはずっと一緒、だろ。だから、早く目を覚まして。」（マドカ）

いまだに深い眠りについている大樹に話しかけるマドカ。大樹が姿を消してから５年という長い月日を待っていたのだ。

「また、明日。明日は簪と箒も来る。いい加減に起きてもらうからな。」（マドカ）

そう言って立ち去ろうとしたマドカだが大樹の瞼がわずかに動いたことに気付いた。一度は強く閉じた瞼がゆっくりと開いていく。起きてしばらくは太陽の光に眼を細めていたが光に慣れていくと部屋の様子を見ていた。そして、マドカの方へと視線が移動した。

「う、ぅあ、う、ん。」（大樹）

まだ、起きて声帯がうまく使えないようだがその表情から目の前の人物がこの世に居る誰よりも大切な人であることを分かっていた。

「大樹‥‥。」（マドカ）

「あ、ああ‥‥。」（大樹）

それからうつむき気味に視線を落とす大樹。その大樹の近くに歩み寄るマドカ。マドカはそのまま大樹を抱きしめた。

「待ってたんだ、ずっと。ずっと！」（マドカ）
大樹の胸の中で涙を流し続けるマドカ。そのマドカを見た大樹は申し訳なさそうな表情をしてマドカを抱きしめた。

病院に急いで駆けつけた一夏、箒、楯無、簪、弾。大樹が居る病室に入るとそこには笑顔で大樹に話しかけるマドカにその話を柔らかな表情で聞いている大樹が居た。
「大樹、目を覚ましたのか。」（一夏）
「ああ、久しぶりだな。」（大樹）
多少しわがれているものの懐かしい声音、その場に居た全員が長い間失踪していた友人だと分かった。
「どこに行っていたんだ!?お前が居なくなった後は学園中で大騒ぎになったんだぞ！」（箒）
「のっぴきならない事情があったんだ。話をするのも正直しにくかった。」（大樹）
箒の叱責に申し訳なさそうに言う大樹。その答えを聞いた箒は他意のないことを分

かっており、５年の月日を経て大樹が変わっていないという確証をやっと持てたのだ。
「ずいぶんときれいになったな。」（弾）
「寝ている間にマドカがしてくれたんだ。正直、起きたらこざっぱりしてて驚いた。」（大樹）
「大丈夫みたいだね。」（簪）
「まあ、万全とは言えないけどな。」（大樹）
そうやって久しぶりに会った友人たちに話していく大樹。その時に横目で何となく嫉妬心が出ているマドカの様子を見た。
「詳しい話は明日する。今日は良いか？」（大樹）
「え、いや、でも。」（一夏）
大樹の言葉を聞いて一夏をはじめとして目を逢わせ合う友人たち。楯無はマドカの様子を見て、大樹の考えが分かりすぐに扇子を出して「了承!!」と意思表示をした。
「分かったわ。今日は休んでいなさい。その代わりに明日はちゃんと話すのよ。」（楯無）
「大丈夫です。それでは。」（大樹）
大樹がそう言うと一夏たちは帰っていった。残されたのは大樹とマドカだけ。
「マドカ、今までにしたことの続きを話してくれないか。今日は面会時間ギリギリま

で居るんだろ。」（大樹）

「良いのか。」（マドカ）

「まあ、一夏たちにはあとで話すし。埋め合わせにはならないだろうけど、良いか。」（大樹）

「いや、私はお前が居るだけでもう十分だ。」（マドカ）

そう言って二人は談笑に興じていた。この時のマドカはまた以前の様に大樹と共にいられると思っていた。一方の大樹はこれまでの埋め合わせにもならないと分かりながらもマドカの話を、マドカのその姿をよく見ていた。ここでの休息がたぶんこれから望むであろう戦いの前に決意を新たにする最後の時間になること大樹は考えており、悔いが残らないようにマドカの姿を、笑顔をその眼に、記憶に焼き付けていた。この時間がもう二度と自分には来ないことを予感していたから。

翌日、大樹の元に楯無と千冬が来ていた。大樹の方から話す相手に二人を指名したのだ。

「それで何を話してくれるんだ。」（千冬）

「俺が戻ってきた理由です。」（大樹）

「理由だけ？私達はそれ以外のことを全く知らないのよ。」（楯無）

「その理由が理由だからですよ。」（大樹）

大樹は自分が日本に戻って来た理由から千冬と楯無に話し始めた。

「俺の両親が死んだ事件、その犯人の兄貴は父さんと母さんが関わっていたんじゃないかっていう研究のデータを使って自分の肉体を改造したんだ。」（大樹）

「５年前に学園を襲撃した謎のフルスキン型のＩＳのことか。」（千冬）

「それが俺の兄貴、勇吾。でも、兄貴は自分の肉体を人間とは違う怪物に変異させたん

だ。俺はずっとそうやって誕生した怪物を相手に戦って来た。」（大樹）

「それで、柏葉君のお兄さんの目的は？いたずらに自分の肉体を改造したわけじゃないでしょ。」（楯無）

「兄貴の目的はＩＳで変化したこの世界を壊すこと。そのために自分の肉体を変異させたその技術を使ってウィルス兵器を作り出した。俺が日本に戻ったのは今度の世界大会をターゲットとした兄貴のウィルステロを阻止すること。そして、兄貴を殺すこと。」（大樹）

兄を殺すという言葉。その言葉は５年前の大樹では到底出ない言葉だった。その言葉も冗談ではなく本当にやるのだということを千冬も楯無もすぐに分かった。

「それで、この５年間は勇吾を追っていたのか。」（千冬）

「まあ。その過程で束姉ちゃんも見つけたけど。」（大樹）

「篠ノ之博士はどこにいるの？亡国機業が壊滅してからの足取りがつかめなかったけど。」（楯無）

「亡国機業が壊滅する前に兄貴と一緒に行動していた。何とか足取りを追って半年前に潜伏先を見つけた。」（大樹）

「束は死んでいたのか。」（千冬）

「死んでいたわけじゃない。そこへ行った時に俺が殺した。クロエ・クロニクルもそ

の時に殺した。」（大樹）
　束を殺した。そして、束と行動を共にしていたクロエ・クロニクルも殺したと。
「待ちなさい。あなたがあの二人を殺したの？私達でも束になって、織斑先生も加わってやっと戦えたあの二人を？」（楯無）
「そりゃ、万全だったら無理だ。でも、俺がそこへ行った時には二人はもうまともじゃなかった。束姉ちゃんもクロエももう人間として生きていけない姿になっていた。」（大樹）
「私達を襲ったあの男の様に？」（楯無）
「いや、あいつの方がまだまし。二人はまるで産卵を控えた女王アリの様に自分の背の何倍も肥大化した腹部から怪物を生み出すためだけの存在になっていた。チューブに繋がれて栄養と水分は与えられ続けて怪物を生み出し続ける、まるで映画のエイリアンそのものの吐き気を覚えるほどの状態になっていたんだ。クロエはとっくに俺の問いかけに反応できない状態でよだれをたらしながらただただ怪物を生み出してた。束姉ちゃんはまだ意思の疎通が出来たけど、ほとんど正気を保っていなかった。」（大樹）
　大樹の口から語られたのはかつて自分たちを苦しめた最凶最悪の相手のあまりにもむごたらしい姿だった。
「束姉ちゃん、最期には千冬姉ちゃんと箒の名前を呼んでた。助けてって言いなが

ら。」（大樹）

「束とクロエ・クロニクルを救ったんだな。」（千冬）

「救った？はっ、あんなのを救ったって。救ってなんかいない。俺のやったことは救いじゃない。」（大樹）

最後に言った言葉、そこには明らかな自嘲の色が見えた。そこでやっと千冬も楯無も理解した。５年という月日は、５年間の東奔西走は柏葉大樹を変えていたことを。かつては仲間たちのことを気に掛け、戦いの場では戦力としてよりも仲間たちの精神的なサポートをしていた心優しい青年は冷徹に物事を判断して行動できるようになり、それを心優しいままにそれを間違っていると、それしか選べない自分を蔑んでいる男になってしまった。

「その潜伏先で兄貴が作ったウィルスのデータを手に入れた。俺の持ち物の中にそのデータが入ったＵＳＢがあったはず。詳しいことはそれを見れば分かる。」（大樹）

「分かったわ。ＩＳ委員会に言って警戒してもらうように言うわ。」（楯無）

「いや、当日の大会には出ないでください。」（大樹）

「なんですって？それをロシア代表の私がするとでも？」（楯無）

大樹が大会の欠場をしてくれと言ったことに対して楯無が眉を吊り上げた。

「先輩、忠告じゃないです。ウィルスのデータを委員会に見せたところで簡単に動か

ないはず。あと2週間を切っている以上は大会を中止にすることもしないはず。」（大樹）

「それでも報告しないと。」（楯無）

「そうだ。私の方からも働きかけはする。」（千冬）

「兄貴は予告をしてそれの通りにやるつもりは一切ない。すでに会場に準備をして後は当日に決行するだけ。兄貴を探し出してテロを阻止、いや兄貴を殺すことがテロを止めることになる。」（大樹）

「それなら私達も力を貸すわ。あなた一人でやらせるわけには行かないわ！」（楯無）

「先輩、俺一人でやります。俺が止めないと。そこに俺の大切な人達を全員巻き込むわけには行かない。」（大樹）

そういう大樹の眼を見た二人。そこにある隠された心情もすぐに分かった。

「大樹、死ぬつもりか。」（千冬）

「明日にはもう俺はここを出る。兄貴を探す前に皆に顔を出すけど。二人は皆が無事でいられるようにしてください。」（大樹）

千冬の問いかけに大樹は答えなかった。だが、否定をしなかった。それは千冬にも楯無にも大樹の中で答えが出ているということに気付いていた。

翌日、大樹は病院を退院した。本来であればいまだに治療が必要な状態であるのだが

大樹は兄勇吾の捜索のために、すでに開催まで2週間を切ったモンド・グロッソを標的としたテロを阻止するために無理に動いたのだった。

「ああ、全然治っちゃいねえ。でも、行かないと。」（大樹）

全身に走る痛みをこらえて歩き出す大樹。その足取りは重く、その姿にはかつてＩＳ学園に居た頃の面影は無かった。

勇吾の行方を探すその前に大樹は５年前に別れを告げた生まれ育った町に戻っていた。どこもかしこもモンド・グロッソでの応援キャンペーンを掲げており、町全体が世界大会に対する熱気で盛り上がっていた。

人々が行き交う中を大樹は遠くから見つめていた。もはや欠片程しか思い出せなくなっていた前世の記憶、顔も声も思い出せなくなった自分の家族のことをふと思い出し幸せに生きているかどうか考えた。だが、それもすぐに消え去りある場所へと足を運んだ。

篠ノ之神社、かつての大樹はここで一夏と箒と共に剣を振るっていた。幼き頃の記憶は既に遠き過去のようであり、まるで他人の思い出のようでもあった。

「柏葉！」（箒）

「おっす。ちょっと顔を見せに。」（大樹）

やって来た大樹に気付いた箒。大樹も箒に声を掛ける。

「大丈夫なのか、身体は。」（箒）

「まあ、1週間も寝ていたんだ。ずいぶんよくなったよ。」（大樹）

実際には完治というにはほど遠い体調だが大樹は箒にはそう言った。

「箒。今日の稽古は終わったぞ。」（一夏）

「よう、親友。」（大樹）

そんな時、道場から道着姿の一夏が現れた。

「大樹!?体調は大丈夫なのか！」（一夏）

「箒に聞けよ。まあ、大丈夫じゃなけりゃここにはいないけどな。」（大樹）

道場から現れた一夏に大樹は手を振る。その大樹の様子に一夏は完全に回復したと思い笑顔でやって来る。

「にしても、戻って来るときに連絡の一つも入れろよな。何も言わずに学園も辞めているし。箒も鈴も、皆がお前のことを探したんだぞ。」（一夏）

「言えるわけがないだろ。あの時、そっちはそっちで亡国機業の関連で忙しかっただろ。さらに5年もいなけりゃ連絡する手段が残っているとでも?」（大樹）
「それでいつまで日本に居るつもりなんだ。戻って来たってことはもういなくなることは無いのだろう?」（箒）
「そうだぜ、もういるんだろ?そうだ、俺の家に来いよ。マドカも一緒に居るしさ。」（一夏）
一夏があれやこれや話す中で大樹は手を出して一夏を止める。
「それだけどな、またすぐに日本を離れる。大会が始まる頃には出る。」（大樹）
「それは、本当なのか?」（箒）
「それと皆に顔を出すけど今日の夜からは一切連絡が出来ない。まだ、終わってないからな。」（大樹）
「おい、何だよ、それ。」（一夏）
「里帰りで戻ったわけじゃない。まだ、やることがあるんだ。」（大樹）
大樹がそう言った時に一夏が大樹の胸ぐらを掴んだ。
「お前、ふざけるなよ!」（一夏）
「ふざけていない。ふざけて5年も居なくなるかよ。」（大樹）
怒りをあらわにする一夏と冷静に言い放つ大樹。その二人のことを幼い頃から知っ

ている箒はその様子から一夏と大樹の間に入り、一夏の手を抑える。
「待て、一夏！柏葉にも事情があるんだろ！」（箒）
「それでも！」（一夏）
「怒るのは勝手だけどな。俺だって自分の事情をほいほい言うわけじゃない。お前にもだけどな。」（大樹）
「てめえ!!」（一夏）
「一夏！柏葉もそこまでにしろ！」（箒）
箒が無理矢理に一夏を大樹と引き離した。このままではいけない、箒はそう思って行動した。それと同時に目の前に居る大樹がかつては同じ学び舎、道場に居た友人とはとても思えなかった。
「変わってねえな、一夏。」（大樹）
「お前は変わっちまったよ。」（一夏）
「変わらなきゃやってやれなかった。変わらずにいたお前がうらやましいよ。」（大樹）
「まだ戻れるだろ。」（一夏）
「無理だ。もう、戻れないさ。お前の様に周りにドタバタと追いかけられている余裕なんて全くなかったからな。」（大樹）
「まだ、お前も俺の仲間だろ！」（一夏）

「お前のそう言うところ、本当に嫌いだったよ。」（大樹）
その次の瞬間には一夏の拳が大樹の左頬を捉えていた。一夏は冷静になり、慌てて大樹に駆け寄る。
「ご、ごめん！大樹！」（一夏）
「それじゃ。」（大樹）
大樹は打たれた頬を抑えることなく一夏と箒に背中を向けて歩き出した。大樹が神社の階段を下りていくところに箒が駆け寄って来た。
「待て、柏葉。そのまま行くのか。」（箒）
「ああ。時間がそんなにない。箒、一夏のことを頼んでも良いか？」（大樹）
「それは良いがどうしたんだ、この５年で。」（箒）
「色々と。でも、また二人の顔を見れて良かった。」（大樹）
「柏葉。今していることが終わったら必ず戻ってこい。私達のためじゃなく、マドカのために。」（箒）
「…。」（大樹）
「５年も待たせていたんだ。また、居なくなる前にちゃんと話をしておけ。」（箒）
「…　ああ。出来たら、ちゃんと戻る。」（大樹）
そう言った大樹の表情を見た箒はなんとなく大樹がこのまま一度も戻ることは無い

だろうということを予感していた。特に、そのことでマドカが最も悲しむことも。だからこそ、言葉を掛けたのだがその大樹の表情はあまりにも疲れ切っていてどこかあきらめているようだった。

それから２週間が経った。千冬と楯無の働きかけでＩＳ学園に怪しいものが無いかを徹底的に調べていったが何も出なかった。千冬と楯無はウィルスのデータをＩＳ委員会に提出するもテロを予告する脅迫文も無かったこともあり、大会は予定通り始まることになった。

２０ＸＸ年８月１５日、第５回モンド・グロッソ世界大会の開会式が始まった。会場の一角に大樹の姿があった。

「一体、どこにいやがる。どこにもウィルスを入れた容器らしきものが無かった。まさか、ここじゃないのか。」（大樹）

フードで顔を隠し、学園の第１アリーナの用務員専用の出入り口から入っており、そこから会場の様子をうかがっていた。さらに、大樹の腰には戦極ドライバーが既に巻かれておりいつでも変身できるように準備をしていた。

「何事も起きなければ引き上げるか。」（大樹）

大樹はそのまま開会式の様子を見守っていた。世界各国の代表が入場。その中には忠告をした楯無の姿が、幼馴染の鈴、セシリア、ラウラ、シャルロットの姿があった。彼女たちの姿を見たときにそこにおかしな人物が紛れていることに気付いた。そこからの大樹の行動は早かった。大樹はロックシードを取り出し、その人物を取り押さえようとした。その人物は大樹が近づいていることに気が付いて警備員の服装から異形の虎の獣人へと姿を変えた。

「よう、屑。ついにここを嗅ぎ付けたのか?」（勇吾）

「兄貴!!」（大樹）

獣人が現れたことで会場はパニックに。さらにその場に居た鈴たちが大樹の姿に気付いた。混乱が起きた会場で大樹は仮面ライダー炎竜に変身。竜炎刀を振るい、勇吾に攻撃を仕掛けた。勇吾は竜炎刀の刃を拳で受け止めた。

「お前もバカだよなあ。俺のことを5年も追いかけ続けて。屑は屑らしく何もしないでいればいいのによ。」（勇吾）

「いや、あんたを止める。これ以上誰も犠牲にさせない。」（炎竜）

「だから、お前はここで死ぬんだよ!!」（勇吾）

勇吾は右手を開き、そのまま空間を切り裂く爪撃を繰り出す。炎竜はそれを見て即座にドライバーを操作、炎の斬撃を飛ばして当てることでその攻撃の軌道を変えた。軌道

が変わった勇吾の攻撃はアリーナの一部を破壊、それを見た観客がパニックの中で各国の選手たちも避難していく。

「柏葉君！」（楯無）

「先輩たちは避難を！速く！」（炎竜）

「おいおい、よそ見とはずいぶんと余裕だなあ!!」（勇吾）

炎竜はその場に居た楯無に避難の誘導を頼む。そこに勇吾は炎竜に躍りかかっていく。獣の様に激しい攻撃をする勇吾に炎竜はもう一つの武器である無双セイバーを抜いた。

「一体、どこにウィルスを。」（炎竜）

「まさか、お前。俺がウィルスを爆弾にするとか考えていたのか？そんな陳腐なやり方にすると思っていたら間違いだ。」（勇吾）

勇吾の言葉に炎竜は勇吾を改めて観る。そして、その言葉に勇吾のやろうとしていることに気付いた。

「まさか、自分の体内にウィルスを。」（炎竜）

「この体に入っているウィルスはこの会場どころかこの島一帯を汚染させることが出来る。俺を殺した瞬間にウィルスが拡散するぞ。」（勇吾）

勇吾はオーバーロードインベスとなった自身の体内にウィルスを仕込んでいた。勇

吾を倒しても学園のある島一帯が汚染される、それほどの感染力のあるものを自身の体内に仕込んでいるということは普通では考えられなかった。

「オーバーロードになったからこそ、か。」（炎竜）

「何もできないよなあ？攻撃をすればウィルスを拡散させる危険性があるからなあ!!」（勇吾）

勇吾はそのまま炎竜に発達した両腕で攻撃をする。うかつに攻撃が出来ない中で炎竜は勇吾の攻撃を竜炎刀と無双セイバーで止めた。そのまま、炎竜は勇吾の腹部に蹴りを入れて距離が離れた瞬間に上段回し蹴りを勇吾の頭部に当てた。

「なら、殴り殺せば問題無いよな。それに俺の攻撃は基本的には火炎を纏うことが出来る。斬った端から傷口を焼いて行けばウィルスの拡散を遅らせることが出来る。このまま、あんたをぶっ殺す。それで何もかも終わりだ。」（炎竜）

「屑の癖に考えているってことか。」（勇吾）

「それに、あんた相手に死なないで殺せるなんて思っちゃいない。刺し違えても絶対にあんたを地獄に道連れにしてやる。」（炎竜）

そう言って炎竜はドライバーを操作、竜炎刀と無双セイバーの刃が炎に包まれた。炎竜は駆け出し勇吾に斬りかかった。

仮面ライダー炎竜ｅｐｉｓｏｄｅダウンフォールンドラゴン後編

炎竜は無双セイバーと竜炎刀を持ち、勇吾へと斬りかかっていく。勇吾は強靭な甲殻を有するようになっている自身の体で炎竜の攻撃を受け止めていく。炎竜はドライバーを操作、無双セイバーと竜炎刀にロックシードからのエネルギーをチャージする。

「ヒャッ!!」（勇吾）

それを見た勇吾は炎竜に飛び掛かり、攻撃をさせまいとする。だが、炎竜の方がわずかに早かった。エネルギーがチャージされた無双セイバーと竜炎刀の刃は炎に包まれ、炎竜は炎の斬撃を勇吾に繰り出した。炎竜が繰り出した斬撃によって勇吾の肉体に切り傷が生じる。本来であれば出てくる出血も炎を帯びた刃によって斬られた端から焼き留められていく。

「鬱陶しい。さっさと殺してやるのによお。」（勇吾）

斬られた傷をなぞりそう言う勇吾。炎竜はそのまま一気に距離を詰めた。

≪ドラゴンフルーツスカッシュ!≫

炎竜の右足に炎が吹き上がり、勇吾の腹部に距離を詰めた時の勢いのままに前蹴りを

放つ。勇吾の腹部にそのまま炎竜の足裏の模様の焼き跡が付いた。

「この屑がっ!!」（勇吾）

勇吾は空間を切り裂く爪撃を放つ。炎竜は咄嗟に距離を取るが勇吾は次々と爪撃を放っていく。放たれた爪撃は次々とアリーナの設備を破壊していき、さらには戦いの場となっている第1アリーナだけではなく隣接している他のアリーナも破壊していく。

炎竜は何とか勇吾の攻撃を躱していくが、その激しさに距離を詰めることが出来なかった。距離を取るためにジャンプをして観客が居なくなった観客席に降り立ったりしてもその次の瞬間には勇吾の放った爪撃が炎竜のいる場所に襲い掛かって来た。

「っ!!」（炎竜）

≪ドラゴンフルーツオーレ!≫

炎竜は無双セイバーと竜炎刀を振るい、勇吾に炎の竜を放った。勇吾に向かっていく炎の竜はその顎を大きく開き勇吾にその牙を突き立てようとする。だが、勇吾は大きく息を吸うと周囲を震わせる咆哮を上げた。

勇吾の咆哮を受けた炎の竜は霧散してしまった。勇吾は炎竜のいる場所を見つけるとそこへ目掛けてまるで弾丸の様に飛び出した。

炎竜は自らに向かってくる勇吾を見てドライバーを操作した。全身にエネルギーが行き渡ると強化された脚力で炎竜はその場から大きくジャンプをしてアリーナの中央

へと戻った。
炎竜がジャンプをしたそのコンマ何秒かしたら観客席に勇吾が突っ込んできて観客席を大きく破壊した。
炎竜はアリーナの中央に着地すると思わずその場に膝が付いてしまった。戦いが始まり数分ほどしか時間が経っていない。その短い時間で逃げ遅れた人間も少なくなく、すでに瓦礫の間には息絶えた人々の亡骸が見えていた。
もっと早くに勇吾を見つけていれば、もっと自分が上手く立ち回っていれば、勇吾に暴れる時間を与えなければ、自分の肉体が万全であれば、様々な後悔がほんの数瞬の間に炎竜の脳裏に巡ってくる。
この短い時間で限界が近づいているほど、炎竜の肉体は酷使され続けていた。最早、生きて帰れるという保証などとっくに無くなっている。だが、炎竜＝大樹もそのことは痛い程分かっていて、それでもなお勇吾を倒せなばならないということを分かっていた。その為には自分の命を文字通り捨てるほかないことを、とっくに分かっていて受け入れていた。
勇吾は炎竜を見つけるとまたも弾丸の様に飛び出し、その牙を炎竜に突き立てた。
「っ!!」（炎竜）
炎竜は咄嗟に左腕を出して防いだが勇吾の牙はアーマードライダーの装甲を破壊し、

アンダースーツの下にある大樹の腕までも傷付けた。その牙からはウィルスがある体液も流れており、傷口から炎竜の体内にウィルスが流れようとしていた。

炎竜は右腕でドライバーを操作、噛みつかれている左腕にエネルギーを集め発火させた。

「ギャッ!!」（勇吾）

さしもの勇吾も口内を炎が焼いたことで噛みついていた炎竜の左腕から口を放した。そのまま炎竜は傷ついた左腕を炎で焼いて止血、さらには左腕の血流を止めるべく傷口の周りを無双セイバーでえぐった。そこをさらに炎で焼いて簡易的な止血を行った。

「ウィルスが回る前に対処したか。」（勇吾）

「5年もサバイバル生活をしていれば対処する技術も身に着く。それに痛みも慣れれば動きをそこまで阻害しない。」（炎竜）

「まあ、俺一人ならばな。」（勇吾）

「まさか、周囲の死体に。」（炎竜）

炎竜がそう言うと周囲の瓦礫から次々と半人半獣の醜い化け物が次々と現れた。

「グールインベスって言うところか。まあ、こいつらは俺の思い通りに動く人形だ。」（勇吾）

そう言うと勇吾は手を炎竜にかざした。その次の瞬間にグールインベスたちは次々

と炎竜に襲い掛かった。

「このまま死ねえええええ!!」（勇吾）

グールインベスたちによって炎竜の姿が消える。それを見た勇吾は遂に炎竜が死んだと思った。だが、

≪パッションフルーツスパーキング！≫

炎竜のいたところからグールインベスたちが吹き飛んだ。そこには赤銅色に山吹色のラインが目立つ鎧を纏った炎竜＝炎竜パッションフルーツアームズが専用武器のパッションフレアカノンから巨大なパッションフルーツ型のオーラを放っていた。

炎竜はグールインベスたちを次々と焼き払い、その中でついに勇吾を視線に捉えた。

≪パッションフルーツオーレ！≫

グレネード弾を連射する必殺技フレアエクスプロージョンが勇吾を襲う。グレネード弾が勇吾の肉体に着弾すると次々と爆発を起こした。

「ここに来てインベスになった人間を殺すのをためらうと思ったのか？甘く見るな。」（炎竜）

爆発の中へとさらに追撃のグレネード弾を撃ち込んでいく炎竜。過剰とも思えるその行為は炎竜が勇吾のことを非常に危険視しており、ここで確実に殺すのだということを現していた。だが、煙を払って出てきた勇吾はかすり傷が付いているだけで眼に見え

る程の消耗は無かった。

「この程度で俺を殺せると思ったのかあ？精々が温い風だぜ。」（勇吾）

炎竜は変わらずにパッションフレアカノンを撃とうとするが勇吾は一気に距離を詰めて炎竜の腹部に強烈なパンチをぶち当てた。装甲が厚いドラゴンフルーツアームズから防御力が下がったパッションフルーツアームズになっていたために胴の鎧に亀裂が走り、勇吾の拳の跡が出来ていた。

勇吾の一撃は非常に強く、炎竜はそのまま吹き飛んでしまいアリーナの壁を次々と破壊し、第1アリーナの外へ出てしまった。

「はっ、がっ！」（炎竜）

炎竜のクラッシャーの隙間から赤い血液が流れていた。さらにはその場で何度も何度も血を吐いていた。その様を見ていた避難している人々はさらにパニックとなる。そこに第1アリーナから飛び出てきた勇吾まで現れ、人々は我先にとその場から逃げていく。

ダメージが回復していない炎竜を勇吾は掴み、第1アリーナの方へと投げ飛ばした。アリーナの壁が迫る中で炎竜は震える手でロックシードを変えようとした。

勇吾から見て第1アリーナの壁が倒壊した様子が目に見えた。そこからアリーナ内に残っていたグールインベスたちが現れ逃げている人々に襲い掛かる。そこを第1ア

リーナの瓦礫が吹き飛び、そこからドラゴンフルーツアームズに戻った炎竜が現れた。炎竜は人々に襲い掛かるグールインベスたちを抑え込み、次々と斬り倒していく。そこを勇吾が近づき炎竜を攻撃する。炎竜は人々に襲い掛かっていくグールインベスに加え、勇吾の攻撃をさばく。だが、ここまでのダメージが大きく、勇吾の攻撃を何発かまとも受けてしまう。その隙を突いてグールインベスたちは人々を襲い、人々が犠牲となっていく。その様相は第1アリーナ周辺から広がり、学園の全域へと広がろうとしていた。

「はあ、はあ、はあ。ガハッ!ゴホっ、ゴホっ!」（炎竜）

「なあ、見ろよ。俺をバカにしてきた奴らの逃げまどう姿をよ。ハハハハハ、ハハハハハハハハハハハハ!これが笑わずにいられるかよ!!ハハハハハハハハ!!」（勇吾）

炎竜は地面に膝だけではなく両手を着いていた。肩で大きく息をしており、時折クラッシャーから血が流れ出ていた。

勇吾は今目の前に広がる正に地獄ともいえる様相を見て笑っていた。勇吾のその様子はあまりにも醜かった。そこに、勇吾に強烈な攻撃が次々と放たれた。さらに消耗している炎竜を誰かが担ぎ、勇吾から離れた場所で降ろした。

「大樹!あんた、大丈夫!?」（鈴）

「ガハっ!鈴、どうして。」（炎竜）

炎竜を助けたのは幼馴染で中国国家代表の鈴だった。その鈴の近くにはセシリアがブルー・ティアーズのレーザーライフルで勇吾に狙撃を行っており、その隣ではラウラがシュバルツ・ハーゼに搭載された火器群を使っていた。さらに勇吾の上、空からはシャルロットが自身の専用機のリイン・カーネイションを操り、セシリアとラウラと共に勇吾を攻撃していた。

「柏葉さん!そのＩＳについてもこの怪物たちについても聞きたいことがありますが!!」（セシリア）

「オルコット!手を止めるな!」（ラウラ）

「ねえ、大樹!あいつは一体何なの!?」（シャルロット）

駆けつけたかつての仲間たちから矢継ぎ早に質問が出る。それに炎竜が答えあぐねいていると鈴が炎竜を立たせる。

「とりあえず、あんたが戦っているってことと他の人たちを襲っている時点で敵、でしょ?」（鈴）

「聞かないのか。」（炎竜）

「話を聞くより今はあいつらをぶっ倒す方が先でしょ?少しあんたは休んでなさい。」（鈴）

この場で恐らく最も自分に問い質したいことも多く、問い質したい気持ちが強いはず

の鈴がそう言う。それに炎竜は無双セイバーを杖代わりにして何とか立ち上がる。
「ごめん。」（炎竜）
「それ、あたしじゃなくてマドカに言いなさい。あんたは許してくれないって考えているだろうけどあの子はあんたのことをとっくに許しているわよ。」（鈴）
鈴は大樹の脳裏にあるかつての姿よりも非常に大人びていた、否実際に大人になったのだろう。その話もたたずまいはかつてはこの場に居る彼女たちと一夏をめぐって小競り合いをしていた少女とは思えなかった。
「一夏の名前じゃなくてマドカの方か。」（炎竜）
「そりゃ、そうでしょ。好きな相手がいきなりいなくなって悲しくて寂しくて、それでも信じているマドカのことをあんたに言わないとでしょ？ここで死ぬなんて詰まんないことを言ったら問答無用で衝撃砲を当てるからそのつもりでいなさい。」（鈴）
鈴の言葉に炎竜は逃げろという言葉ではない別の言葉を口にした。
「ありがとう。」（炎竜）
「それもマドカに言いなさいよ。」（鈴）
５年の空白を感じさせない鈴の接し方が炎竜の方から力を抜かせた。体は限界を迎えており、まともに動けないはずなのに気力がみなぎるを感じる炎竜。無双セイバーと竜炎刀を持ち直し、先に歩み出した。

「周りの雑魚を頼む。それとシールドエネルギーが少なくなったらすぐに退避するんだ。」（炎竜）
「分かったわ。それじゃ、行ってきなさい、大樹。」（鈴）
「ああ、行ってくる。」（炎竜）
炎竜はセシリアたちの攻撃を受けている勇吾に向かって走り出した。それを見た鈴は双天牙月を薙刀にしてグールインベスたちを切り裂く。
「さあ、来なさいよ。今日のあたし、最初は気分最低だったけど今は最高に良いんだから。」（鈴）
「ふん！勝手に消えた奴が帰って来たところで私は絶対に許さん。」（ラウラ）
「まあまあ、ラウラもそう言わずに。」（シャルロット）
「皆さん、すぐに終わらせて柏葉さんを援護しましょう。絶対に柏葉さんを帰らせませんと。」（セシリア）
彼女たちは向かってくるグールインベスたちを次々と倒していく。彼女たちは今かつての仲間の炎竜＝大樹を彼の帰りを待つマドカの元へ帰すために一つとなっていた。

炎竜たちがＩＳ学園でインベスを相手に戦っている頃、織斑邸にいるマドカの元に来客が来た。

「マドカ！」（簪）
「どうしたんだ、簪。」（一夏）
急いだ様子で来た簪は出迎えた一夏にも声を掛ける。
「テレビのニュース、モンド・グロッソが大変なことに。」（簪）
「テレビなら今はマドカが見ているはずだぜ。すぐに上がれよ。」（一夏）
一夏に言われ、家の中へと上がった簪。二人がリビングへ入るとそこにはテレビの画面を凝視するマドカが居た。テレビの画面にはモンド・グロッソの舞台となっているＩＳ学園の第１アリーナの惨状が映し出されていた。
マドカはテレビから振り返ると急いで玄関の方へ走っていった。
「おい、マドカ！どうしたんだ!?」（一夏）
一夏の言葉に返事もせずにマドカは玄関を出た。
「はあ、はあ、なあ、帰ってこないなんて嘘だろ。私をもう置いて行かないなんだろ?」（マドカ）
走りながらはるか先のＩＳ学園で戦う思い人に問い掛けるマドカ。彼が失踪してからの５年は彼女にとって非常に長かった。それでも必ず彼が自分の所へ戻って来ると信じていた。
帰りを待っているその彼が、テレビに映っていた。彼の最後の肉親である兄と壮絶な

殺し合いをしているのが一瞬だけ映ったのだ。
胸の中で急激に肥大化する不安、５年前に彼＝大樹が傷だらけになって帰って来た時に感じた以上の不安と恐怖がマドカの胸の内を満たしていく。
「頼むから、頼むから行かないでくれ。私から、大樹を奪わないで。」（マドカ）
気付けば流れていた涙。それを拭いながらマドカは夜の町を走っていく。

ＩＳ学園ではその戦火は第１アリーナだけではなく、隣接している他のアリーナにも及んでいた。第１アリーナは既に更地同然になっており、隣接していた第２、第３ア

リーナも半壊していた。非難する人々は何とか学園から本土へと向かうモノレールの駅へと殺到する。だが、混雑する駅周辺はパニック状態に、誰もが我先にと逃げようとする。各国の要人は学園内にあるヘリポートから続々と島から離れていく。

「良い？あなたたちは避難する観客をそのまま船に乗せて。」（楯無）

楯無は各国の代表と共に観客の避難を進めている。この惨状を生み出した張本人と対峙する炎竜＝大樹の身を案じる。そして、彼を助けると言ってその激戦地へと向かった鈴たちのことも。それでも国家代表として、暗部の長として長く前線に立っていた彼女はそれを表には出さなかった。

炎竜と勇吾は戦いの場を学園の校舎の近くへと移していた。彼らの戦いの余波で校舎の窓ガラスが割れ、外壁が崩れ、教室がその姿を変えていった。ここまでの戦いで疲労一つ見せない勇吾に対して既に満身創痍である炎竜。だが、満身創痍の炎竜は勇吾に食いついていた。自らが握る無双セイバーと竜炎刀をしっかりと握り、勇吾の攻撃を見切り、力強い二刀流で切り裂いていく。

「鬱陶しい。さっさと死ねよ！肩が!!」（勇吾）

「お前を殺すまで死ねねえよ。それにあそこまで鼓舞されたら無様に負けるなんて出来るかよ!!」（炎竜）

戦う中で炎竜はロックシードを入れ替える。敏捷性に優れた緑色のシークワーサーアームズに変わると勇吾の周囲を高速で走り出し、ジャンプをしては蒼雷杖を突きだし、退いたかと思えば蒼雷杖を伸ばして勇吾は予想もしなかった方向から次々と攻撃を繰り出していく。

勇吾は自身の周りに爪撃を次々と放っていくが炎竜は周囲の瓦礫を上手く使い、それを躱していく。

≪シークワーサースカッシュ！≫

炎竜は蒼雷杖にエネルギーを集中させ勇吾の肉体に突き立て必殺技のボルトパニッシュを発動させた。

「が、ギャア!!」（勇吾）

ここで初めて勇吾が痛みの叫びをあげた。本来であれば瞬時にインベスを爆発四散させるのだが、勇吾の肉体から血が断続的に噴き出るだけで本来の威力を発揮しなかった。そこから炎竜はパッションフルーツアームズへ変わり、勇吾の傷口からパッションフレアカノンの銃口を食い込ませて追撃にそこから次々とグレネード弾を撃ち込んでいく。

「て、てめえ!!」（勇吾）

勇吾は撃たれながらも炎竜の頭を掴み、学園の校舎に打ち付けたあとはそのまま壁に

押し付けながら投げ飛ばした。

炎竜は地面に落ちるが基本形態のドラゴンフルーツアームズへと戻り、距離を詰めてきた勇吾に無双セイバーと竜炎刀を振るう。だが、それも勇吾は力づくでねじ伏せ、炎竜の仮面に頭突きをかました。その衝撃を凄まじく、炎竜の仮面が割れ、その内部にある大樹の右眼があらわになった。そこに勇吾が自身の右腕を横なぎに払った。その時に勇吾の鋭い爪が露になった大樹の右眼をえぐったのだ。

「がああああああああ!!!」（大樹）

右目から血を流し、大樹は剣を地面に突き立てた。

「っ！ぐっ！ああああ!!」（大樹）

意識的に痛みを無視することをしてきた大樹でも神経にまで届いたその傷から生じた痛みに悶えていた。

「手こずらせやがって！死ねえええええ!!」（勇吾）

勇吾が爪を振り上げ大樹に振り下ろそうとした時に勇吾目掛けて目に見えない空気弾が何発も当たった。さらに空気弾だけではなく他にもミサイルやレーザーなどが勇吾に当たり続ける。

勇吾が動けなくなった隙を突いて、大樹は痛みをそのままに何とか無双セイバーと竜炎刀を握り直し、勇吾から距離を取った。

大樹は完全に光を感じることが出来なくなった右目から流れる血をそのままに自身を助けに来た者たちの姿を見た。セシリアの愛機であるブルー・ティアーズは特徴であるビットが全て失っており、ラウラのシュバルツ・ハーゼも装甲のほとんどを失っていた。比較的損傷が少ないシャルロットのリイン・カーネイションも装甲の一部が損壊していた。そして、鈴の甲龍が最も損傷がひどく衝撃砲も一つしかなく、スクラップ寸前の状態だった。

「もう、下がれ！それ以上続けるのは危険だ!!」（大樹）

彼女たちの様子を見てこれ以上の戦闘の続行は危険すぎると考え、大樹は彼女たちに退くように言ったのだ。だが、煙の中から無傷の勇吾が現れると彼女たちを一瞥した。すると、勇吾の体が震えだした。

「フフフ！アハハハハハ！これは傑作だ!!アハハ！まさか、この世界の象徴ともいえるＩＳ乗りが!!アハハハハハ!!これは良い！俺の考える新世界の創造にふさわしい!!」（勇吾）

勇吾の言葉に背筋に嫌な寒気が走るのを感じた大樹。恐る恐ると駆けつけた鈴たちを見ると勇吾が生み出したウィルスに感染したことを示す肌の変化がわずかながらに見られたのだ。それを見た瞬間にこれまでにない程の絶望を感じた大樹。ずっと、彼が恐れていた事態になったことを指し示していた。当然ながら、ＩＳに乗る彼女たちもＩ

Ｓから示されたデータによって自分たちの肉体に何が起きているのか想像していないわけじゃない。出来ることなら逃げたいはずなのにそれでもなお彼女たちはその場に居たのだ。

「へえ、じゃあ、あんたから説明してよ。あたしたちに残っている時間をさ。」（鈴）

その中で鈴は普段の様子のままに勇吾に問い掛けた。

「俺の体内にあるウィルスは感染後１０分ほどで体内をめぐる。まあ、お前たちの様子だと保って数分だな。」（勇吾）

「おい、兄貴！ワクチンはあるんだろうな!!」（大樹）

「あるわけがないだろ。お前たちに残っている道はウィルスによってインベスに変貌する、その道だけだ。」（勇吾）

「ふざけるなああ!!」（大樹）

勇吾の言葉に大樹は詰め寄ろうとするがそれを鈴たちが阻んだ。

「良かったわ。これで踏ん切りがつくわ。」（鈴）

そう言うと鈴は両隣に立つセシリア、シャルロット、ラウラと顔を見合わせる。彼女たち全員が覚悟を決めた表情でいたのだ。それを後ろから見る大樹はそれが意味するものを即座に理解した。

「辞めろ!!」（大樹）

大樹がそう言う前に彼女たちは勇吾に立ち向かっていく。ＩＳでは敵わない、大樹ですら歯が立たない相手に彼女たちは一歩も退かなかった。だが、

「ふん!!」（勇吾）

「ラウラ!!」（大樹）

「はあ!!」（勇吾）

「シャル!!」（大樹）

「ヒャッ！」（勇吾）

「セシリア!!」（大樹）

瞬く間に勇吾の凶爪に倒れる彼女たち。残る鈴もすでにＩＳが強制停止してしまっていた。

勇吾は生身となった鈴にその爪を振るうがその間に大樹が割って入り無双セイバーと竜炎刀で何とか防ぐ。

「くっ！ぬうう!!」（大樹）

「大樹！」（鈴）

「おいおい、そいつは放っておけばインベスになるんだぞ？助けてどうする？」（勇吾）

「うるさい!!」（大樹）

大樹は勇吾の腹部を蹴り、斬りつける。

勇吾は跳び退り空気を吸い込み強大な衝撃波を伴う咆哮を上げる。
咆哮を受けた大樹と鈴はその場から飛ばされてしまう。
「はあ、はあ、クソっ！」（大樹）
大樹は悔しそうに地面に拳を叩きつける。最早、現状は大樹自身が考えていた最悪のシナリオを進んでいる。収束は無い、あるのは破滅的な結末のみである。
「一体、一体、どうすればよかったんだよ!!クソ！クソ！」（大樹）
「大樹。もう良いわよ。あんただけでも逃げて。」（鈴）
自分の無力さに地面を叩く大樹に鈴が声を掛ける。すでに鈴の肉体はウィルスの影響を受けてきており、その姿も人間のものから離れようとしていた。自身のことよりも大樹に逃げるように言ったのだ。
「置いて行けるか、置いて行けるかよ!!」（大樹）
「もう手遅れなのはあんたも分かるでしょ。それだったらあんただけでも逃げるべきよ。」（鈴）
「俺は何のために、これじゃあ皆を守るために一人で戦った意味がない。」（大樹）
「もう良いじゃない。あたしはあんたの頑張りを認める。だから、もう。」（鈴）
ここまでの中で鈴の姿が刻々と変化していく。それでもなお大樹は逃げようとは思えなかった。

「さて、最後にしてやるよ。」（勇吾）
そこに遂に勇吾が来た。
大樹は心が折れそうになりながらも立ち上がる。そこに、半人半獣となった彼女たちの姿が目に入って来てしまった。
「ええ、最期よ!!」（鈴）
そう言って鈴は勇吾に向かって行った。その鈴に対して勇吾が瞬時に距離を詰めて強烈な掌底を当てて鈴を地面に倒れ伏せた。
「鈴!!」（大樹）
大樹が鈴の名を呼ぶ。すると鈴が立ち上がった。その姿はすでに彼女たちと同じになってしまっていた。
「よし、やれ。」（勇吾）
勇吾は自身の傀儡になった鈴たちを大樹にけしかけた。
「辞めてくれ！目を覚ましてくれ!!」（大樹）
大樹はインベスとなった彼女たちに必死に声を掛ける。だが、彼女たちの攻撃が止まることは無かった。そこに、鈴が大樹を押し倒した。
「――――――。」（鈴）
小声で集中しないと聞けない言葉だった。それを聞いた大樹は仮面の下で歯を食い

しばった。
「ごめん。」（大樹）
そう言って大樹は鈴に無双セイバーの刃を突き立てた。そうしたら鈴が一切動かなくなった。
鈴の死体をどけて、大樹は次々とインベスとなった彼女たちを切り捨てていく。
「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアあああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」（大樹）
セシリアを断った、シャルロットを断った、ラウラを断った。潰れた右目、いまだに光をとらえ続ける左目から涙を流して大樹は勇吾に向かって行く。そこを勇吾は大樹の顔面に強烈な掌底をそのまま浴びせた。それにより、完全に仮面が壊れ、中から大樹の素顔が現れた。勇吾の掌底によって大樹の残った左目も潰れてしまった。
「おら、死ねぇえ!!」（勇吾）
遂に勇吾の剛腕が大樹の腹部を貫いた。その瞬間、大樹は自身の心が完全に粉々になった音を聞いた。

同じ頃、ＩＳ学園を目指す一団が居た。マドカ、一夏、箒、千冬だった。彼女たちは千冬が使う車に乗りひたすらに走っていた。道路は至る所で渋滞していた。そこを千冬の運転する車を渋滞の車が向かう先とは逆の方向を進んでいた。車の中で彼らは無

言だった。ただ、マドカだけは両手を固く握り祈っていた。

「やっと、やっとだ!もう、俺を邪魔する者はいない!!」（勇吾）

そう言って勇吾は大樹の腹部から手を抜こうとした。だが、すでに死に体である大樹が信じられない力で勇吾の腕を掴んだのだ。

「フー!フー!フー!ウウウウウ、ガアアアアアアアアア!!」（大樹）

獣がごとき叫びをあげると大樹は無双セイバーの刃を勇吾の頭部に力づくで食い込ませた。

「がっ!てめえ!!」（勇吾）

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」（大樹）

≪ドラゴンフルーツスカッシュ!!≫

炎を帯びた無双セイバーがゆっくりと勇吾を切り裂いていく。

「ギャアアアアアア!!」（勇吾）

勇吾は痛みの叫びをあげながら大樹から離れようとするがそれも叶わなかった。ゆっくりと、ゆっくりとあらん限りの力で押し込まれる無双セイバーは勇吾の頭、胸、腹と下がっていき、最期には勇吾を両断した。

「ギャアアアアアア！アアアアアアアア！」（勇吾）

勇吾は最後まで苦悶の叫びをあげ続けた。勇吾の肉体が灰になるまでその叫びは続いた。

勇吾を倒したその瞬間に大樹は地面に倒れた。その大きく開いた腹の穴から血を流し続け、潰れてしまった両目は虚空を眺めていた。

仮面ライダー炎竜ｅｐｉｓｏｄｅダウンフォールンドラゴン　エピローグ

すでに本来の姿を失ったＩＳ学園では残されたグールインベスたちも次々とその肉体を急激に劣化させて消滅していく。その中には大樹を助けようと戦った鈴たちも当然含まれていた。

瓦礫の中で大樹はその命を終えようとしていた。

大樹が倒れている場所から離れた場所ではＩＳを展開した一夏が千冬を、マドカが箒を伴い降り立った。

「おい、大樹！返事をしろ!!」（一夏）

「柏葉！いるのか！」（箒）

一夏と箒はすぐに辺りを探し始めた。

学園の惨状を見たマドカは脳裏に嫌な情景が浮かんでしまった。マドカはすぐに動き出し、学園の校舎の方へと向かった。かつて、大樹とともに過ごした頃の面影が残っておらず、戦いの余波によってもはや廃墟になってしまっていた。

変わり果てた学園をマドカは大樹の姿を探していた。その胸中を満たしていく不安

に駆り立てられるようにマドカは瓦礫の中を探し歩き回る。そこでやっと大樹の姿を見つけたのだ。

「大樹!!」（マドカ）

マドカは横たわる大樹を見て、その場に駆け寄った。

「なんで・・・　いるんだよ。」（大樹）

「千冬姉さん!一夏!箒!大樹が!大樹が!!」（マドカ）

マドカは大樹の腹に出来た大きな穴から流れ出ていく血を止めようと両手でその傷をふさぐ。大樹の傷を抑える中でマドカは共に来ていた千冬、一夏、箒を呼んだ。

「おい、大樹!大丈夫なのか!?」（一夏）

「見れば、分かるだろ?現在進行形で死にかけているって。」（大樹）

駆けつけた一夏たちは大樹の姿を見て言葉を失った。それほどまでに大樹はもう長くはないことが分かっていたからだ。

「姉さんの所に行くぞ!きっと、助かる!」（箒）

「そのこと、だけどな。死んでんだ、束姉ちゃん。それに、あの人が俺を、簡単に治す訳がないだろ?生きててももう間に合わないって。」（大樹）

ここに来て、大樹は箒に束がこの世に居ないことを告げた。自分に時間がそうないことを分かっているから。それを聞いた一夏と箒は打つ手がないことで暗い表情となる。

その近くではマドカが必死で大樹の傷を抑えていた。流れる涙をそのままに泣きながら大樹の生存を強く祈っていた。

「大樹、勇吾は？」（千冬）

千冬が大樹に事の元凶である勇吾について聞いた。それを聞いた大樹は声を頼りに千冬の方へ向いた。

「死んだよ、千冬姉ちゃん。」（大樹）

「そうか。」（千冬）

「大樹、大樹！」（マドカ）

「ごめん、マドカ。約束、守れそうにない。」（大樹）

「良いから、しゃべるな！まだ生きてやることがいっぱいあるだろ!!」（マドカ）

大樹は自らの傷を抑えるマドカの手を握りしめる。

「ダメだった。鈴たちまで巻き込んで。それでも大勢の人が死んだ。皆、俺が殺した。こんなことになって、何もできなかった。」（大樹）

「なら、生きてやり直せよ！まだ、間に合うんだぞ。」（一夏）

「そうだ、弱気になるな！」（箒）

無情にも大樹の肉体から徐々に熱が失われつつあった。それは、大樹に残された時間

がもう終わりに近いことを示していた。

「そんなんでも、そんなんでも、死にたくないもんだな。皆とまだいろんなことをしたかった。」（大樹）

それは当の本人はとっくに分かっていた。だから、自分の思いを話すことに時間を使うことにした。

「未練しかない、未練だらけだ。頼むから俺が死んだあとは何事もなかったように過ごしてくれ。ちゃんと、幸せになってくれ。」（大樹）

そう言って大樹は最後にマドカの手を強く握った。マドカに対して言ったのだと伝えるように。

「嫌だ！嫌だ！逝くな！逝くな！私を一人にしないでくれ!!大樹！わあああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」（マドカ）

大樹の意図を察したマドカは目の前の現実を拒絶するように叫ぶ。

「俺、皆と一緒に居れて良かった。」（大樹）

大樹は最後は笑顔でいた。それを見た一夏と箒も涙を流していた。千冬もこらえていたが一筋の涙が流れた。マドカだけは大樹の死を受け入れらずに泣き叫んでいた。マドカの手を握っていた大樹の手が力を失った。

「あ、あ、あ、あ、あ、あああ

あああ!!!!」（マドカ）

学園中にマドカの叫びが響く。

２０ＸＸ年　柏葉大樹　死去　享年２０歳

大樹のことは後の歴史ではそう大きく残ることは無かった。人々の間で第５回モンド・グロッソで起きた悲劇は多くの謎で満たされていた。だが、正確な真相を知る者は

誰もいなかった。その悲劇の発端とその経緯をはっきりと知っていた最後の人物が死んだからだった。

それから5年の月日が流れた。マドカは病院の病室に居た。彼女もまた既に寿命が残り少なかった。ここまでの生き方が確実に彼女の肉体を蝕んでいた。

「じゃあ、またね。」（簪）

簪が毎日来ていた。だが、最近では起きたマドカと言葉を交わした回数は少なかった。すでにこの1か月近くは深いまどろみの中に居るマドカの身体を拭くだけのことが続いていた。

「ここは、どこ?」（マドカ）

マドカは暗闇の世界に居た。音も光も届かない静寂の世界、もうすぐで自分が行くであろう死後の世界を連想した。そこに最も愛する人がいることを信じて。

「もうすぐなんだ。もうすぐで、あの人がいる場所に。」（マドカ）

自分の命が終わる時が近づく、それが再会の時と信じて。

マドカはまた意識を闇の中に手放そうとした時だった。
「それで良いのか？」（???）
不意に誰かの声が聞こえた。それはマドカの知っているどの人物とも違っていた。
「誰？」（マドカ）
マドカがそう言うと暗闇の向こうから眩い光に包まれてこちらに向かって歩いてくる人物が居た。その人物は白銀の鎧を纏っており、さらには白いマントを羽織っていた。近づいてくるとその神は純白でその双眼は片方の目が赤色だった。
「君はこのまま死んで良いのか？」（???）
「だって、もう私の体は。」（マドカ）
その人物がマドカに問い掛ける。既にマドカ自身も肉体が限界にあるのは分かっている。その問いかけが自身の生存ではなく、全く別のことであることは容易に理解できた。
「心残りならたくさんある。それと同じくらい、それ以上に望んでいることも。でも、私にはもう時間が無い。」（マドカ）
したくても出来ない、そのことをマドカは言った。それに対してマドカに語り掛けた彼は言葉を発した。
「もしも、また彼に会えるとしたら？」（???）

「どういう意味？彼って、大樹のことを知っているの？」（マドカ）
相手から出た彼というの言葉にこの世から去って5年もの月日が流れたマドカの愛する人＝柏葉大樹のことがマドカの脳裏に出てきた。
「柏葉大樹はここと少し違う世界、俺のいた世界にいる。」（???）
「生きてるの？大樹は生きてるの!?」（マドカ）
「柏葉大樹はあらゆる世界を何度も何度も生まれてきた。その何度目かに俺の世界で転生した。」（???）
男から出てきた言葉はマドカには信じられない言葉だった。それでも男の様子から嘘ではないことはすぐに分かった。
「でも、俺のいた世界でも柏葉大樹の辿る運命は苛酷だ。彼はもう戦うことが運命づけられている。」（???）
「そんな！大樹はもう十分に戦った！どうして!!」（マドカ）
「倒した兄もそこに転生したからだ。そうでなくても柏葉大樹が戦うことは避けられない。」（???）
「そんな…。」（マドカ）
男の言葉に大樹に待っている苛酷な運命を知ったマドカは大樹の死に際を思い出した。

「だから、君の所へ来たんだ。君の魂だけでも俺の世界へ連れていける。」(???)

そう言った男の手にはマドカがずっと使っていた愛機＝黒騎士があった。

「俺の世界に居る君と今の君が夢の中でつながっていた。だから、君の所へ来れたんだ。俺のいる世界の君はとある事情で魂が不安定なんだ。今いる君が俺の世界へ来ることが出来れば俺の世界の君も助かる、それに柏葉大樹の力になれるはずだ。」(???)

その話を聞いた時に既にマドカの中で決心がついていた。そもそも、マドカにとっての望みはただ一つである。

「もう一度、もう一度大樹に会いたい。今度は、今度はちゃんと私の思いを大樹に伝える。それだけじゃない、もう大樹を一人で戦わせない。大樹に助けてもらった、今度は私が大樹を助ける。」(マドカ)

マドカはそう言うと男の手の中にあった黒騎士に手をかざした。

「分かった。じゃあ、行こう。」(???)

男＝葛葉紘汰がそう言うとマドカが居た世界が光に包まれていった。

それからほどなく、織斑マドカは織斑万夏として最愛の人と再会を果たした。そして、彼女も激しい戦いの中に身を投じたのだった。